2023 優駿エッセイ賞
次席（GⅡ）
受賞作

愛想のないものたち

森本 公久（もりもと きみひさ）

受賞のことば

50代も半ばを迎えると、残された時間をどう生きるか、自分に問いかけるようになる。ナイスネイチャの死を知り、犬を見送った後、私は自然とPCの前に座っていた。文章を書く仕事から離れて13年もたった身に何が表せるのか、戸惑いもあった。そんなおじさんの丸まった背中を「四の五の言わず書きなさい」と彼らが押してくれた気がしている。これから歩んでいく先に明かりがひとつ灯った。

プロフィール

スポーツ紙で15年半、競馬、野球等を担当。その後は職を転々。父に連れていかれた淀で見たテンポイントが競馬の最初の記憶。振り返ると、浮き沈みの激しい人生のそばには、いつも競馬があった気がする。

まるで笑っているみたいだった。15歳を目前に逝った柴犬のハッピーは、籠でできた棺の中でとても優しい顔をしていた。

「出棺まであと10分になりました。大変残念ですが、こちらでお別れとなります」

ペット霊園の女性は深く頭を下げると、白い小さな部屋から出ていった。

3週間前、腸に大きな腫瘍が見つかった。切除には成功したが、すでに脳へ転移していたらしく、手術後はもがき苦しみ、最後の2日間は力尽きたように眠り続けた。

「そうしたら尻尾をね、2回、ぱたぱたって振ったのよ。そうしたらね」

ハッピーの顔のまわりを花で飾ってやりながら、母は涙声になっていた。

「ずっと眠って動かなかったのに、あれはお別れを言いたかったのかな」

その言葉を聞きながら、私は亡骸の頬のあたりを撫でた。無愛想なやつらしい控えめな別れの挨拶だと思った。そういえば元気だったころは、こうやって頬を撫でようものならがぶっと噛みついてきたっけなあ……。

そのときふと、ハッピーの闘病が始まる少し前に、天へと召された馬のことが脳裏をよぎった。

ナイスネイチャと出合ったのは1991年の6月、確か梅雨時とは思えない暑い日だった。

大学を卒業してスポーツ紙の競馬担当になったばかりの私は、毎週栗東トレーニングセンターに泊まり込んでいた。聞けない、書けない。朝の調教取材は囲みの大外でメモを取るだけ、運よく誰かと一対一になっても、緊張で世間話のひとつもできなかった。2時間もかかってやっと書いたわずか15行の雑感記事も跡形もなく手直しされた。一方で相撲担当に配属された同期は若貴ブームに乗って連日一面を飾っている。入社からたった2ヶ月で、自分の描いた未来図がいかに甘いものかを思い知らされた。

午後も遅くなりその日の仕事になんとか一段落つくと、私は厩舎回りをするようになった。軽口をたたきながら余裕で仕事をこなす先輩たちを見ていると、息苦しくて、なにかきっかけがつかめないものかとひたすら歩いた。だが勇気を振り絞って厩舎の人に声をかけても、見ず知らずの若造とまともに向き合ってくれる人にはなかなか出会えなかった。

とびが宙を舞い、ハロー掛けの音が馬場の方から聞こえてくる。たったひとりで先々のことを考えると、自分の存在がどんどん小さくなっていく気がして、体に震えがきた。悲しいわけじゃないのに、なぜか馬道の砂に涙がぽたぽた落ちていく。

それは、静かな午後の厩舎地区にはかなり不釣り合いな笑い声だった。声をたどって歩いていくと、厩舎の表札には「松永善」と書かれてあった。大仲部屋の前で10人ぐらいの男たちが車座になり、練炭コンロで肉を焼いていた。

「兄ちゃん、見いひん顔やな。ちょっと飲んでいき」

車座の中の誰かが手招きした。急なことに戸惑い一度は遠慮したが、「どうせ暇なんやろ。辛気臭い顔してんと、こっちおいで」と余っていた丸椅子に座るよう勧められた。

「先週、うちの厩舎が2勝したんや。勝ち祝いやねん」

冷えた缶ビールを手渡してくれた男は、厩務員の馬場と名乗った。酔いがまわっているのか、目元が赤い。

「すごいですね。馬場さんの馬が勝ったんですか」

「いや、俺の馬やない。俺の馬はこれからや。そうや、ええもん見せたるわ」

あとをついていくと、薄暗い馬房に皮膚の薄い大きな鹿毛馬が佇んでいた。

「ナイスネイチャっていうねん。年明けの若駒ステークスはトウカイテイオーの3着やったけど、トウ骨の痛みさえなかったら負けてない。脚元はもうパンとしたからな。これからが勝負や」

けがで休養している無名の1勝馬を無敗の二冠馬と比べ

るとはなんとも無謀だが、馬場さんのぎらぎらした目を見ていると、空っぽだった私の体内までエネルギーで満たされていく気がした。

馬場さんに許しを得てネイチャの頬を撫でようとした。けれど私の手はあっさり交わされ、馬房の奥に引っ込んでしまった。「秋は天下を取るで」とうなずく馬場さんと、物静かで素っ気ない馬、その温度差が面白くてたちまちこのコンビに惹かれていった。

半年ぶりに中京で復帰したネイチャは初戦こそ2着に敗れたが、小倉で覚醒した。５００万と９００万特別を連勝、一気にGⅢ小倉記念への挑戦が決まった。直前追い切りが行われたその朝は、この夏最大の上がり馬という常套句を冠しようとする大勢のマスコミに追い回されていた。

小倉競馬場に長期出張していた私は、同業者が引き揚げたころを見計らいネイチャの馬房を訪れた。相変わらず手を伸ばしてもぷいと横を向いてしまい、気を許してはもらえなかったが、毛づやはどうか、瞳の力強さはどうかと観察しながら、日々の出来事を胸の内で語りかけると、ざわざわした心が不思議と落ち着いた。

関係者が集まる宴会で下手くそなカラオケで大すべりしたこと、遠距離恋愛の彼女と電話で喧嘩してしまったこと、少しずつ仕事に自信が湧いてきたこと……。

そうしたネイチャとのひとときは、いつしか大切な時間になっていた。

「まだ触らせてもらえへんのか。ファンの子は普通に触ってたで」

寝藁を片付けていた馬場さんが振り向いて笑った。これには苦笑いで返すしかなかったが、競馬場の人にこんなに受け入れてもらえる日がくるなんて、2ヶ月前には想像もできなかった。

「明日の木曜日、夕方からあいてるか」と馬場さんが続けた。

「追い切り見てたやろ。もう、負けるとこあらへん。厩舎で小倉記念の前祝いやろや。モツと野菜を焼肉のたれでぐつぐつ煮込む特製鍋や。これがうまいねん」

濃い味の鍋とビールと、ゴールを突き抜けるネイチャの姿を夢想しながら、今なら誰にも負けないヒーロー原稿が書けると思った。書けばきっと、殻を破れる気がした。

だが私には、どちらの機会も巡ってはこなかった。出張を急きょ切り上げ、オグリキャップの半妹オグリホワイトを追いかけるようデスクから命じられたのだ。

小倉記念の日、岐阜県の笠松競馬場で行われた秋風ジュニアというレースを取材しながら、イヤホンでこっそりラジオを聴いた。ネイチャは4番手から悠々と抜け出し、馬場さんの言葉通り、本当に天下が見える位置まで駆け上がってしまった。

オグリホワイトの送稿が終わっても、しばらく記者席から立てずにいた。うれしさと悔しさがないまぜになって、机を叩きながら叫びたい衝動にかられた。窓の外は雨だった。炎天下の小倉が羨ましかった。

記者席には誰もいなくなった。私は笠松競馬場の職員にもう少しのあいだ席を使わせてほしいと頼み込み、ラジオの実況を思い出しながら、紙面に載ることのないネイチャのヒーロー原稿を書き始めた――。

出棺後2時間ほどで、白い陶磁器の骨壺に収まったハッピーが戻ってきた。

17年前、競馬にもっと深く関わりたいとレーシングマネージャーを志し新聞社を退職、千葉から栗東に移り住んだ。しかし新しい夢をかなえるには実力もしたたかさも足りなかった。2年半で心が折れ、仕事も人間関係もずたずたになって千葉に逃げ帰った。店で売れ残り、処分される寸前だったハッピーが我が家に来たのはそのころだった。

無職の引きこもり、どん底だったあの一年は、ハッピーとの散歩が外界との唯一のつながりだった。朝焼けを見たり、ひぐらしの声を聞いたり、雪の中を走ったり。甘えることが下手な媚びない柴犬だったが、それでも一緒にいるだけで、悪魔の誘いをなんとか跳ね返すことができた。

ペット霊園を出た私は、骨壺を抱えながら強い日差しを浴び、強い風に吹かれた。自分を育て、救ってくれたふたつの命の死が重なった。そのことが胸を締め付けた。動悸を抑えるため、深呼吸をして、空を見た。この世を去るとき、ネイチャの瞳に映った空はどんなだったろうと思った。

ネイチャと最後に合ったのは、引退が決まり栗東を去る日だった。調教取材の合間に馬房まで行くと、白い息を吐きながらたてがみをブラッシングする馬場さんがいた。

「お前には一番損させたからな。これ」

手渡されたのは蹄鉄だった。

「さっきまでこいつが履いていたやつや。大事にしてやってくれ」

最初に会った日も赤くなっていた馬場さんの目元は、違う感情でまた赤くなっているように見えた。

GⅠは勝てなかった。小倉記念の後、重賞を3勝したが、どういう巡り合わせかヒーロー原稿を書く縁には恵まれなかった。常に単勝を買ったから確かにかなりやられたが、決して損をしたとは思っていない。青臭くて、無垢な、眩しい5年半だった。

ネイチャは静かに別れを待っていた。闘うことから解放された馬は、それを悟ったかのように優しい瞳をしていた。

そっと手を伸ばしてみた。これまでずっと顔をそむけてきたのに、ネイチャはこのとき初めて頬を寄せてきた。あれから26年半、手のひらに沁みた温もりは今も忘れない。